令和8年度 第1回吹田市文化振興審議会 議事要旨

1 開催日時 令和8年8月18日（火） 開会：午後2時　閉会：午後３時40分

2 開催場所 吹田歴史文化まちづくりセンター 会議室

3 案　件　　（1）推進する主な取組の実施状況の確認（令和7年度実績）

（2）吹田歴史文化まちづくりセンター視察

4 出席委員

会長	加藤 義夫	大阪芸術大学美術学科 客員教授
副会長	中根 佳江	大阪大谷大学教育学部准教授
委員	芦田 稔	公益財団法人吹田市文化振興事業団 事務局長
委員	西田 晴美	バレエ指導者（ハルアンジェバレエ代表）
委員	乾 将万	ピアニスト（INUI MUSIC SALON 代表）
委員	花むら てん	吹田市文化団体協議会 会長
委員	馬場 英朗	関西大学商学部商学科 教授
委員	金井 隆典	大和大学政治経済学部政治・政策学科長 教授
委員	井上 浩	市民委員
委員	牧 慎一郎	市民委員

5 公開・非公開の別 公開・非公開

6 傍聴者　なし

7 会議進行

【（1）推進する主な取組の実施状況の確認（令和7年度実績） 事務局資料2説明】

（F 委員） それぞれの取組の位置付けが分からない。推進する主な取組に記載されている事業はすべて行政上の目的のために実施されているものなのか。

（事務局） その通りである。

（G 委員） 取組の評価が難しい。この資料だけでは、評価についての方向性がわかりにくい。

（事務局） 来年度が評価の年にあたることから、今回の審議会においては、実施している取組の一覧のご紹介としてお示ししたもの。来年度に評価いただく際には、個別事業の評価にとどまらず、文化政策に関する評価をいただきたいと考えているため、評価方法について、整理する必要があると考えている。

（A 委員）　審議会においてはそれぞれの委員の専門分野から自由な発言をお願いしたい。それを事務局で精査いただき、実現できる政策に落とし込んでもらいたい。

（J 委員）　事業評価の全体像が必要と考える。提示されている資料の膨大な文字列から文化政策全体の評価を審議会で評価するとなるとかなり膨大な時間がかかる。たとえば、ここに記載されている事業のうち文化政策の重点項目としてピックアップして、他市比較や定量的な評価を行うなど、客観的な分析が必要。来年度が評価のタイミングであるならばその準備をしておくとよい。吹田は幸いにも人口が増加している。この潮目を利用して、今文化レベルを向上することで、市のブランディングにつなげていくといった前向きな政策ができるのではないかと思う。そのためにも効果的な分析をするべき。

（A 委員）　今後も、引き続き専門的な視点から提案をお願いしたい。

（H 委員）　事業を実施している室課による自己評価では必然的に A、B が増えてしまうため、基準を設けることについては有効かと思うが、文化の性質上、経済的な視点からの評価のみでは測れない部分もある。行政の文化事業においては、むしろ経済効果が低くても保存すべき文化活動を支えることが目的の事業もある。これらの事業の評価の難しさを感じている。

（A 委員）　文化の定量的評価は経済的評価につながる例が多い。行政の文化政策には収益性の低い事業であっても守るべき文化については継続して実施するという役割があると考える。

（H 委員）　それでも税金を使って事業をする以上、基準は設けるべきである。

（A 委員）　評価の基準として、資料2において S 評価を追加した。その理由として、以前は A、B、C の3段階評価としていたところ、ほとんどが B 評価であった。そのため、施策の推進がされていないように見えていたのを改善する目的で4段階とした。

（G 委員）　日本の評価では課題を探すことに終始しがちだが、海外では改善のための評価を行う事例がある。改善するためにはどうしたらよいのかといった、もっと自由な視点で評価することもできるのではないか。

（A 委員）　この審議会では、各専門分野から自由な意見を出していただき、行政で実現可能な政策に落とし込むことが有効な方法ではないかと考えている。文化政策は予算があれば様々なことができるが、予算が限られているためにできることに制限がある。加えて予算削減をされやすい分野でもある。

（J 委員）　評価は改善のために実施するものであり、改善のためには長所、短所も理解することが必要という視点から基準を設けることについての提案をさせていただいた。また、目標の設定も必要であり、定量的、定性的に関わらず、現実的に目指せる範囲での適正な目標値の設定も重要。進捗状況の資料にはその点が欠けている。

（G 委員）　目標設定も政策との関連ですべきであり、単に参加人数などとすると多ければ良いのか、という議論にもなってくる。

（A 委員）　他自治体では数値目標ばかりを追求し、政策目標とずれている例もあり、危険性はある。

（事務局）　この審議会では個別事業の数値目標について議論いただくのではなく、次期計画策定に向けた評価ということで、現行の計画で施策ごとに示している「今後」の内容も踏まえて評価いただけるよう、検討していく。

（C 委員）　確認だが、この審議会では個別事業の評価ではなく、次の計画につなげるための施策全体の評価を行うという理解で良いのか。

（事務局）　おっしゃるとおり。現行計画で示している施策ごとの「今後」にある「目指すべき姿」を達成できているかどうかという視点で評価いただきたい。

（C 委員）　それであれば、個別事業の評価と「目指すべき姿」の関連が見えにくいことが一番の課題。そこ

の関連が分かるようになれば評価がしやすくなるのではないか。

（J 委員） いくつかの事業をピックアップして深掘りして評価することも有効かと考える。

（I 委員） 今までの議論を聞いていると委員の専門性を生かした発言をいただき、市でまとめていただくのが現実的。文化は結局のところ、実際にその文化に触れている市民自身がどう満足しているか、どう評価しているかが結果ではないかと思っている。

（B 委員）市民の評価を最後に落とし込めたら良いかと考えている。高齢化が進むなかでも、やはり将来を考えると「こどもが楽しめる、文化に親しめる」という評価も今後の市制には重要。また、この文化政策ビジョンの大綱について各室課がしっかり理解することも各事業の進捗管理をする上で重要。

（H 委員）審議会としての今後の評価の指標については、計画で記載している各施策の「今後」を一つの指標として考えるという認識でよいのか。

（事務局）各施策の「今後」を市が考えている目指すべき姿として評価してほしい。

【（2）吹田歴史文化まちづくりセンター視察　説明】

（指定管理者より施設、施設事業についての説明、施設の視察）

【閉会】